「ふるさと春日井学」研究フォーラム
Forum for Furusato Kasugai Studies
「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ
『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報
NO. 79
2021.11.12 発行
編集責任者：河地 清
Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第79回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

ﾃｰﾏ: 『地域活性化を考える』

ーいきいき地域づくりの実践例②ー
ー夕張派遣体験から考える地域の活性化ー
～人から人へと情熱を伝染させる～
講師：神戸 洋史氏
（大留下棒の手保存会 会長・春日井市夕張市役所派遣職員）

今回のテーマは、「地域活性化を考える」―いきいき地域づくりの実践例②ー夕張派遣体験から考える地域の活性化ー～人から人へと情熱を伝染させる～で設定しました。当フォーラムでは今日まで「ふるさと意識なくして地域の活性化なし」をベイシックな考え方として、「理論と実践」の両面からいくつかの実践例を学んでまいりました。今回は、財政破綻自治体となった北海道夕張市へ春日井市から派遣職員として地域の再建と活性化に取り組んでこられた体験を中心に、地域の活性化とはどのようなことか、どのように取り組んだか、何が必要か、そして、様々な人との出会いとその中から生まれてくる感動や情熱のエピソードなどを語っていただきました。

コロナ緊急事態宣言が解除されたばかりでしたが、15名の参加者がありました。

テーマ説明をする河地会長

会場風景

棒の手の衣装を手に講演：神戸洋史氏

《講演要旨》

１．夕張市の財政破綻とは？

夕張で雪かきをする神戸洋史氏

～市が破綻しても、人々の暮らしは脈々と続いていく…

現場から感じたことは、「財政破綻とは市役所の倒産である。」「市が破綻しても人々の暮らしや活動は脈々と続いていく。」ということです。

「市役所の倒産」には２つの意味があって、一般に公務員は解雇されないとされていますが、夕張市の場合には、退職金削減により事実上職員の半数以上が大量退職しました。また、市職員の給料は３割カットされ、残された職員は生活保護基準額に相当する生活を強いられていました。

「市が破綻しても、人々の暮らしや活動は脈々と続いていく」ということは、人がそこで生きている以上、水を飲み、食事をとり、買物にも行きます。病気になれば病院に、介護が必要になれば介護保険サービスを受け、トイレやゴミを出すなど、住民の生活は無くなることはありません。また、町内会などの地域活動や趣味、健康などの市民活動も人がそこで生きている以上、脈々と続いていくのです。

市が破綻したからといって、人々の暮らしや活動は脈々と続いていくのであって、最低限の行政サービス、例えば、水道や下水道の管理、ごみの収集、道路の整備、国民健康保険や介護保険事業の運営など、行政は支え続けていかなければならない。「市役所の倒産」のもう１つの意味は、企業の倒産と違い、行政、市役所自体は何らかの形でも存在し続けなければならないということです。

また、市役所ができないのであれば、自分たちでやろうという動きが各地で活発化し、市民活動が活性化していきました。

ゆうばり再生市民会議は、夕張の再生を市民の手で何とかしよう活動で、緊急時に救急医療に関する情報を伝える「命のバトン」の立ち上げなどを行いました。ゆうばり国際映画祭も、市民の手で復活するなど、一緒に参加していて逆に情熱や元気をもらいました。

２．夕張派遣物語～情熱は人から人へと伝染する

「超高齢社会を生きる」ということですが、当時、夕張市の高齢化率が 44%。医療、介護、福祉関連予算が膨張する中で、今本当に何が必要かを考え、介護拠点の整備や認知症学習会、地域包括ケアネットワークなどを進めました。

次に、「情熱家との出会い」ですが、夕張医療センターの村上先生を始めとした熱意

あるスタッフや地域医療を支える人々が頑張っていました。

また、北海道知事の鈴木直道知事も、当時東京都から派遣されていて、一緒に様々な市民活動に参加しました。

鈴木直道氏（現北海道知事）と神戸洋史氏

鈴木知事の呼びかけで、夕張市役所の若手職員の会が立ち上がり、20 代の職員は数人なのですが、ゆうばり寒太郎まつりの復活に夕張の青年会議所や農協青年部と一緒に取り組んだり、紅葉まつりや映画祭で「夕張メロンポップコーン」をボランティアで販売し、収益の一部を夕張市に寄付したりするなど、厳しい環境に負けずに頑張っていました。

最後に、「再生への鍵は」ですが、トップのリーダーシップ次第で組織は栄えも滅びもするということです。夕張の中田元市長もカリスマ性、不屈の精神、情熱、ビジョンを持った強いリーダーでしたが、時代の変化を見誤ったと思います。

夕張の１年間を通じて、北海道の鈴木知事、東京都の猪瀬元知事や小池知事、映画「幸せの黄色いハンカチ」の山田洋次監督など、様々な方にお会いしましたが、「リーダーシップとは人間力」と、自分自身の心と胸に強く刻まれました。

３．郷土芸能を守る～復活！棒の手保存会

大留下区では、戦争で途絶えていた棒の手を 1960 年代前半に古老たちが保存会を結成し、伝承活動を続けてきました。やがて昭和から平成と時代が移り、働く世代の指導者が激減し、当時 30 年以上にわたり孤軍奮闘で指導していた方が脳梗塞を患って引退し、保存会は運営の危機に瀕していました。

平成 21 年に夕張市の派遣から地元に帰ってきましたが、地域活動の大切さを学んだ私は、棒の手保存会が危機に瀕していることを聞き、棒の手保存会の復活に取り組みました。棒の手を存続させたいと願う熱い想いを持った 30～40 代の若手世代に声をかけ、風前の灯から保存会は危機を脱しました。

地域の秋祭りだけでなく、春日井まつりや市教育委員会文化財課が主催する小学校での郷土芸能出前講座にも参加。市制 75 周年記念事業では春日井市棒の手活性化委員会を結成し、内津文化財祭など市内各地で棒の手保存会が一堂に集い、演技を行うなど、棒の手の伝承活動に貢献しています。

また、尾張旭市印場地区の東軍流とともに、豊臣秀吉のゆかりのある豊国神社での豊国まつりに参加させていただくなど、様々な活動を広げ、小中学生だけでなく高校生、大学生などの若手世代も参加し、保存会は復興を遂げたのでした。

しかしながら、今また新型コロナウイルス感染症の影響により、秋祭りはじめ

写真：大留の棒の手演技

様々な活動が中止となり、子ども会を中心とした保存会活動が難航し、同時に働き世代の指導役も離散しがちな状況で、保存会は再度危機に瀕しています。

４．人から人へと「情熱」を伝染させる究極の方法

棒の手を始め伝統芸能とは、「人から人へ」と伝承するものですが、仕事や学業、家庭など現代生活が多様化する中で、それらに優先して、地域の伝統文化を継承し、保存会活動を続けていくことは困難であり、常に逆境や危機的状況に瀕しているといっても過言ではありません。

全国的にも多くの団体が、一部の情熱を持つ、献身的な伝承者に支えられているのが実態ではないでしょうか。我が保存会でも、前会長は 93 歳まで小学校の体験授業の指導者を務め、棒の手の伝承と保存会の復興を何よりの生きがいとしていました。

先人から受け継いだ思いや情熱を次世代へとつなげることは、想像以上に苦難の道が待ち受けており、悩み、もがき、苦しむ中で、それでも伝統芸能を続けていくしかないのです。

棒の手の伝統衣装に「風切」があります。東軍流の「風切」は龍の刺繍を胸に刻み、子どもたちの憧れの衣装で、身に付けた子どもは眼を輝かせ、演武を行いますが、残念ながら財政的に数が不足している状態でした。

しかし、苦難の道にも人生には、ときに一筋の光が差し込むことがあります。明治安田クリティオブライフ文化財団に応募したところ、助成金をいただくことになり、伝統衣装の「風切」を購入することができました。この意義は、子どもたちの憧れを実現し、将来の指導者、伝承者を育てることにつながります。

「情熱は人から人へと伝染する。」

そのためには、まずは自分自身が情熱をもって楽しむことが大切です。楽しい、好きという気持ちや雰囲気は、必ず伝染します。情熱を持った人を集めることも大切です。

それから、「同じ釜の飯を食う」ことで連帯感が生まれ、伝統衣装や刀を身に着けることで生まれる憧れやカッコいいという感情は、地域活動を活性化させる原動力になり

ます。

また、一定の資金力も必要ですが、例えば祝儀は金額よりも、感謝の気持ちの表れだと思いますし、永年の功労者を表彰し、みんなで感謝の気持ちを伝えあうことの方が大切だと思います。

「情熱は人から人へと伝染する。」

きっと近い将来、子どもたちが大人へと成長し、棒の手の伝統芸能を受け継ぎ、さらに次の世代へと情熱をつないでくれると信じ、その日まで、自分自身の情熱を絶やさず、一人でも多くの人に伝染させたいと願っています。

地域の伝統芸能を守る人々永年功労者と記念撮影

（神戸洋史氏から報告要旨の原稿を寄稿していただきましたので加筆編集させていただきました。）

（編集責任：河地　清）

OPINION

地域活性化の原動力は、人であり、その情熱である！

神戸洋史氏の講演は、感動的でした。共感できる内容でした。「～人から人と「情熱」を伝染させる究極の方法!?」のタイトルが示すように地域の再生・活性化は、結局当事者であるその地域の住民であり、住民の強烈な「ふるさと意識」とそれを支える情熱であることがよく理解できました。

市役所が倒産したのです。市職員給与３割カット職員の大量退職、全国最高の負担、最低限の行政サービス、行政による限界自治の中で、市民は疲弊してゆきました。そんな中で市民は立ち上がりました。市民活動の活性化を計るため、「夕張再生市民会議」が発足しました。市が破綻しても、人々の暮らしは脈々と続いていくことを考えれば、財政破綻から地域再生への足がかりが出来たことになります。お金、希望、情熱・縁（出会い）が地域再生・活性化の必要条件である。人との出会いも重要であり、献身的に地域医療のために情熱を燃やしていた村上智彦氏との出会い、東京都から派遣されていた鈴木直道氏との出会いは、希望と情熱こそが環境を変える原動力であることを学んだと神戸氏は述べられました。一年の任期を終えて春日井に帰るに当たって、「ふるさと」は本当に大事なんだなと痛切に感じたと言う。現在地域活動で行っている、ＰＴＡ活動、伝統芸能の保存活動は、夕張での派遣体験が大きな原動力になっていると言う。

神戸氏のエネルギッシュで情熱的な語りに、自然と引き込まれ、何事も「やればできる」というパワーをいただいたような気持ちになれました。

「地域活性化」を考える時のキイワードは、「情熱」「希望」「出会い」ということができます。勿論「お金」も重要です。しかし、「お金」は、「情熱」「希望」「出会い」のないところには出ません。今日、「まちづくり」「地域活性化」は、「地方創生」の観点から様々な実践や、手法が提示されていますが、定式化されたものはありません。地域、地域によってその進め方、手法は違います。成功事例もあれば、失敗事例もあります。その地域の置かれた situation の中で試行錯誤するしかありません。

成功事例で共通しているのは、本会フォーラムの基本的主張である①地域の特色・魅力（地域資源）「ふるさと意識」を活かした手法を取っているか。②地域当事者に、「情熱」「希望」そして、「desperate（必死の）覚悟」があるのかどうかということではないかと思います。79 回フォーラムでの神戸氏の話は、そんなことを強く感ずる講演であると同時に「地域活性化」実践への強いメッセージでもあると思いました。

「ふるさと回帰現象」がすすむ今日の日本

先日、私の勤務する医療・健康系の大学で担当する 150 名（90%女子）の学生に、選挙の投票へは必ず行くようにと呼びかけるとともに、簡単なアンケートを取ってみました。問いは、「卒業後どこで暮らして行きたいですか」というものです。回答は、自分の生まれ育った地元、家族のいる場所、自分の家から通える場所というのが 80%以上を占めていました。てっきり東京、名古屋、大阪といった都会が多くを占めるのかと予想をしていたのですが、意外な結果でした。かって、高度経済成長の時代以降は都会へ出て働くことは、高収入を得しあわせな暮らしがあることを夢見て、憧れでもありました。一方地方には就業場所がなくやむなく都会へ出て行かざるを得ない「集団就職」の時代でもありました。アンケート結果は、限られたデータではありますが、現代の若者は、必ずしも高収入を求めて就業場所の多い都市を望んでいるわけではないという傾向が窺い知れました。

日本総合研究所の藻谷浩介主席研究員、ふるさと回帰支援センター高橋公理事長が、コロナ禍によって、若い世代の「ふるさと回帰」の意識が増加してきているとする調査結果を公表しています。所得曲線と幸せ曲線は比例しない、ある一定の年収額を超えると幸せ曲線は停滞・逓減して行くと言います。「東京で必死に働いて稼ぐという価値観を変えて行かなければなりません」（藻谷浩介）「家族のそばにいるのが幸せだとコロナ禍で気づいた福利厚生や給与面で納得いく企業が見つかってよかった」（高知県出身都内の大学を卒業・就職内定者）「収入は減ったがデパートでの買い物や外食が減り月３万～５万お金を使わなくなった、近所から野菜をもらったりして貯金に回している。自然豊かでリラックス、癒されている。」（東京から移住したＴさん）このような、ふるさと回帰現象ともいえる傾向が、コロナ禍を契機に加速化しているのではないでしょうか。

（文責：河地　清）

かすがい市民活動情報サイト：http://kasugai.genki365.net/

ふるさと春日井学　検　索